

岡山エフエム放送社長賞

僕の目標

津山市立津山東中学校

一年生 宇佐美 大地

たえちゃん、とあえて書くが、僕の二歳上の姉の話だ。先に明記すると自慢話だ。

たえちゃんは、幼いころから語彙が多くて愉快な話をしていたそう。母から聞いた話だが、幼稚園の先生にキンモクセイを教わった帰り道に、「いい香りだね、すいもくせいでしょ。」と、母に言ったそう。曜日で感覚で新たな単語を覚えたのだろうか、聞いた言葉、読んだ言葉をすぐ自分のものにしようとしていたエピソードの持ち主だ。今では超読書家で僕の国語の先生のような。

そのたえちゃんが、作文で表彰された。それも三年連続、なんと題材は僕なのだ。

ここからは敬意を払って姉と書こうと思う。三年前、姉の作文はおか山っ子で特別賞を受賞して山陽新聞に載った。いろんな人に僕まで声をかけてもらって恥ずかしかった。本音は、鼻が高かった。確かに、わが姉ながら読み応えのある優しい視点の作文だった。そして、今年も特別賞を受賞した姉は、作文を朗読するためラジオ局に行くと言う。これは僕もついて行かないといけないだろう。

それなのに、姉は行きたくないと言う。作文は時間をかけてゆっくり推敲しながら書けばいいけど、その場で話すのは苦手なんだそう。結局、回答期限ギリギリまで悩んで、姉は行くと決めた。母に人生勉強だと言われたことが決め手だったそう。何事も社会勉強、人生勉強。ますます僕もついて行くべきだと思った。姉がラジオのスタジオで朗読する場面を隣で見たい。こんな機会は滅多にない。だって題材は今年も僕なのだから。

ラジオ局へ向かう日、朝から姉は緊張しているようだった。意外だった。僕から見る姉はいつも落ち着いている。お茶のお手前するときも、突然雷が鳴ったときも、元々おっとりとした性格だけど、取り乱したり慌てたりしないように見える。姉の緊

張を少しでも和らげようと思っていたのに、僕だって知らないところへ行くというのはやはり緊張する。

ずいぶん前に三谷幸喜さんの作品「ラジオの時間」をビデオで見た。だから僕の想像では、ラジオの裏方は時間にせかされてきつい言葉が飛び交うのだろうかと心配していた。ところが、エフエム岡山のオフィスに入ると、みなさんが業務の手を止めてにこやかに挨拶をしてくれた。優しそうな人ばかりだ。なんだ、拍子抜けした。僕の緊張は一気にほどけた。

オフィス内を通り抜けるように奥へと案内されたのは、靴を脱いで入る音響機器がたくさんある部屋だった。その中にテレビで見たようなスタジオがあった。姉はやたら重い扉を二枚も開けて隣のスタジオでマイクに向かって口を動かしていた。こちらでは何も聞こえない。姉がガラスの向こう側でマイクテストをしたり、アナウンサーの森田さんと話をしたりしているのを眺めながら何だか誇らしい気になった。やっぱり、たえちゃんにはスゲー。長い髪の優しそうな女性ディレクターが機械を操作すると、スピーカーから姉のこわばった声が聞こえた。たえちゃん、がんばれ。ガラス越しにガッツポーズを送った。僕の野球のときに姉がしてくれるポーズだ。大丈夫、落ち着いて、

声がかすれているぞ。父と母と一緒に手を合わせて「エイエイオー」とポーズもした。姉は照れくさそうだった。何をかくそう、僕も照れくさかった。教職員組合の人やラジオ関係者に見られていたからだ。でも、姉の緊張をほぐす方が先だ。

朗読の本番が始まった。ガラスの向こうで姉が話したことがスピーカーから聞こえる。自分の世界に入ったなと思った。やっぱり姉はすごい。後半になるにつれ良い調子で、かすれ声はすっかり無くなっていった。いつも母が言う姉の「肝が据わっている」ところだ。

朗読が終わったら保護者インタビューで、母がスタジオに入る予定だった。さっきの優しそうなディレクターさんが、

「弟君もどうぞ。」

と言ってくれた。僕も入っていいの？これこそ社会見学だ。うきうきしながら父と共に気軽について行った。スタジオの中に家族四人が入り、アナウンサーの森田さんと打ち合わせをしていると、

「チーム宇佐美のみなさんのお名前を。」

と、透き通っていて優しく聞き取りやすい声で話をされる。やっぱりプロだなと思った。僕は名前を言うだけでいいし、ど

うせ、質問されたとしても、

「はい。」

「そうです。」

くらいだと思っていた。このときの僕は余裕があったのに、インタビューの本番になって僕は慌てた。「え、こんなに質問されるの？なんて答えよう」と、思うことが多かった。台本には僕への質問なんて一つもなかったのに。まずい。どうしよう。パニックになった。

「大丈夫、上手に編集してくれるからね。」

と、森田さんに励まされて何とか話し終えた。でも、何を話したか覚えていない。姉は落ち着いて、いつものように表現力豊かに話していたというのに。そういえば森田さんも姉の語彙力の多さや文章力をほめておられた。

収録を終えて家族でお昼ご飯を食べに行ってから、僕は、あ言えば良かった、こう言えば良かったと後悔していた。でも終わりに編集するから大丈夫よと言ってくれたのでちょっと安心している。質問から回答までの間があることが多かった。あんなに頭が真っ白になる経験はこれからもあまりないだろう。

母は、

「タイチだって、野球しとるときはものすごく大きく見えるし、冷静で度胸があると思うことがよくあるよ。」

と言ってくれた。野球は練習をしているけど、話の練習なんてしていない。緊張するのは当然だと言いついて聞かせてみるが、もっとうまく話せたんじゃないかとやっぱり後悔が残る。本当は野球だって内心は緊張しているんだけど。

ラジオの放送が楽しみでもあり不安でもある。姉の朗読や話は聞きたい。僕のインタビューはどう編集されているのだろうか。姉のおかげで体験できた社会勉強は強烈でほろ苦かった。けれど、見たことがない世界が見られたのでわくわくした。これからたくさん経験して、たくさん悩むだろう。頭が真っ白になる経験もするだろうけど、これはちょっといい。僕の姉は、作文での表現は上手で、話すことには苦手意識があるけど結局は落ち着いて堂々と朗読し、インタビューに応じていた。自由時間があつたら僕は寝る。きっと姉は本を読むだろう。語彙力はこの差だろうなあと思いつつながら、いつかは僕も姉みたいな自分も人もわくわくさせる作文を書きたいと思う。

今まで姉は僕を題材に作文を書いてくれたので、今回は僕が姉を題材に書いてみた。